



ステップスギャラリー吉岡のブログを見ると、この展覧会は本来、金在寛の個展の筈が、金の要請により、吉岡そしてステップスで作品を発表する宇野との三人展になったという。重苦しい展覧会ではなく、三人による雑談 = Triple Chat という展覧会のタイトルどおりの展示になったが、それでもレベルの高い作品が並んだ。

韓国在住の金はステップスギャラリーにおいては2012年5月に個展を開催し、13年4月のギャラリーコレクション展(金/十河雅典/フランク・ディテューリ)に出品して今回に至る。一貫した主張を持つ作品群であるが、その度毎に新しい発見があるのは、作品が強い証拠である。同時に、吉岡によるキュレーションも冴え渡っている。

金は今回、中型の作品2点を出品した。凹凸のある変形キャンバスにステンレスの立体を埋め込んでいる作品は、キャンバスに描かれている図像と立体が反転し、見る者の視線を揺っていく。その上で壁にかけられている立体の作品に眼を移すと、今度は物質性が失われていくのだ。絵画と彫刻が持つ特徴が、形而上に回帰していく。

京都に拠点を定める宇野和幸はステップスギャラリーにおいて個展ではなく「うのゼミ展」として2012、13年4月にグループ展を開催した。在校/卒業を問わず、生徒を自分と対等の作家と看做して展覧会を行うことができるのは並大抵ではない。その上、出品作家だけではなく展覧会フライヤーで外部に対して美術を問いかける。



宇野は今回、大型と中型(共に四枚組)の作品を一点ずつ、小型の作品を三点、計5点を出品した。四枚組の作品は続けて描いた物を切断したのであろう。間の空間が作品の奥行きを豊かにする。共に断面をずらすので、映像のような振幅が生まれる。小型の作品には伝統的で荘厳な額が付けられ、権威を哄笑するだけではなく自らにも問いかける。

吉岡はこれまで画廊での個展は2012年5月のみで、13年1月のグループ展「北京遭遇」以来、久しぶりの展示となる。今回は1982年から始めているテーブル・インсталレーションではなく、大人が片手で振り回せるサイズの木にクサカバのアキーラで着色した作品を12点、出品した。絵画でもあり立体でもあり、インсталレーションでもある。

細長い棒が壁に掛かっている姿は、不思議な感覚がする。作品中央で分断された全く異なる色彩は、色の原則に合わせることなく感覚で選択されている様子だ。色に反発も調和も生まれない。それは描く時の筆致が大きく影響している。強く/弱く、早く/遅く、優しく/激しく描かれる筆跡に、吉岡のこれまでの闘争が浮き彫りとなっていく。

三者の作品に共通するのは、空想の切断面である。実際に切断されていないからこそ切断をイメージさせ、その断面という不可視な状態を可視化させる。我々は目の前にある世界に生きているのではない。にも関わらず、その剥き出しの世界から無意識に目を背けようとする。我々は現実を直視することを恐れず、アーティストと視線を重ねるのだ。